＜実践報告＞

小学校の学級活動でエージェンシーを育成するための指導方法の検討
―学習指導案，児童のワークシート，教師へのインタビューの活用を中心として―

林　尚示　安井一郎　鈴木　樹　眞壁玲子

（東京学芸大学　獨協大学　鎌倉女子大学　千代田区立教育研究所）

A study of teaching methods for fostering agency in elementary school classroom activities: The use of lesson plans, worksheets and teacher interviews

Hayashi Masami, Yasui Ichiro, Suzuki Tatsuki, Makabe Reiko
Tokyo Gakugei University, Dokkyo University, Kamakura Women's University, Chiyoda Ward Educational Research Center

キーワード：　学級活動，エージェンシー，学習指導案，ワークシート，インタビュー

抄録

学習指導案，児童のワークシート，教師へのインタビューの活用を中心として，小学校の学級活動でエージェンシーを育成するための指導方法について検討を行った。授業は，OECD が Learning Compass 2030 で提唱する the Anticipation-Action-Reflection cycle で実践された。教師は個人的ウェルビーイングよりも集団的ウェルビーイング（Collective Well-Being）の重要性について指導案段階から意識していることがわかった。Think-Pair-Share と One-Minute Paper を用いた指導方法で，エージェンシーの感覚を多くの児童に意識させることができた。

１．はじめに

本研究で言うエージェンシーとは OECD が重視している用語で OECD Future of Education and Skills 2030 Conceptual learning framework OECD LEARNING COMPASS 2030（OECD, 2019）で用いられている概念である。なお，この概念は，1 年先だって公開された OECD のポジション・ペーパーに短い説明があり「Agency は，社会参画を通じて人々や物事，環境がより良いものとなるように影響を与えるという責任感を持っていることを含意する」（OECD, 2018: OECD, 2020a）と定義されている。本研究でも，OECD の定義を踏襲する。このエージェンシーの感覚（sense of agency）の重要性について，松尾ら（2020）は，特別活動の目標部分には，エージェンシーに関する記述が多

く見られたことを指摘している。また，扇原ら（2020）は，中学生を対象として，エージェンシーについて，社会とのつながりや自己実現性など特別活動とも関連する特徴を指摘している。これらはエージェンシーの先行研究として数少ない主要なものであるが，小学校における特別活動の指導方法との関連で検討したものではないため，本稿のアプローチには新規性がある。本研究では，学習指導案，児童のワークシート，教師へのインタビューの活用を中心として，小学校の学級活動でエージェンシーを育成するための指導方法について検討を深めた。

義務教育のスタートの段階であり学校教育の基礎的な部分であると考えたため，小学校を対象とした。そして，教師の授業意図が明確に表明されている資料である学習指導案を活用することとした。一方で，学習者側からみた学習の成果を把握するための根拠となるため，児童のワークシートを活用することとした。さらに，教師の意図と実際の授業のずれについての意識や予期しない成果を発見するため，教師へのインタビュー調査を活用することとした。研究対象となる学習については，学級活動が特別活動の要の活動であるため，学級活動を対象とした。特別活動は学校教育で集団活動をとおした人間関係が意図的に形成される場であり，社会的資質の育成に果たす役割が大きいと考えたからである。特に学習指導要領に基づく学級活動（1）を取り扱ったのは，学級会として合意形成に基づく民主的な社会参画と人間関係の形成をとおして児童の自己実現につなげられる重要な内容だと考えたからである。

一方で，学習指導のみならず，生徒指導の面でも主要な役割を担い，児童生徒の状況を総合的に把握して教師が指導を行うことで，児童の知・徳・体を一体で育む日本において，とるべきアプローチは必ずしも欧米諸国と同じではなく，学校が生徒指導の面でも主要な役割を担う「令和の日本型学校教育」を前提とする考え方もある（中央教育審議会初等中等教育分科会，2020　p. 3）。また，「集団的ウェルビーイング」など OECD の学習モデルは，文化の違いによってとらえ方が異なってくるという考え方もある。しかし，人間関係に関する問題が多発している現在の日本の学校教育において，個と集団との新たな関係を構築する上で，集団的ウェルビーイングの実現に資するエージェンシー（集団的エージェンシー）に着目することは特別活動の研究に一定の示唆を与えると考え，本研究では特別活動とエージェンシーの関係を考察の対象とすることとした。

２ 方法

２．１ 研究対象と調査の概要

本研究は質的研究であり事例研究である。クラス人数の面から平均的（2019 年東京都通常学級児童数 578,887 名，通常学級数単式 18,947 複式 5，学級当たり約 30 名）な東京都多摩地域の公立小学校の第 4 学年の特別活動の学級活動（1）の授業を各学期 1 回，年間 3 回参観し，事前・事後の質問紙調査（図 1）を実施し，児童による Think-Pair-Share（TPS）と One-minute paper（OMP）のワークシートを分析し，事後に教師へのインタビュー調

質問紙（事前　2020年1月31日 1・2・3組用

学年（4）　組（　）　番号（　）　氏名（　　）

このアンケートに書いたことは成績には関係ありません。また、研究のためだけに使い、一人ひとりについて誰かわかるようには公表しません。思ったとおりにかいてください。なお、「よくできる」については自信を持って答えられるときのみ選んでください。

質問内容	どれか１つの番号に〇をつけてください。
1. 今までの学級会では、相手の思いを受け止めながら意見を聞くことができましたか。	1 できない　2 あまりできない 3 どちらでもない 4 だいたいできる　5 よくできる
2. 今までの学級会では、提案理由を考えて話合いに参加することができましたか。	1 できない　2 あまりできない 3 どちらでもない 4 だいたいできる　5 よくできる
3. 今までの学級会では、相手にとってわかりやすく自分の意見を発表できましたか。	1 できない　2 あまりできない 3 どちらでもない 4 だいたいできる　5 よくできる
4. 今までの学級会では、友達のよいところやがんばったところをみつけることができましたか。	1 できない　2 あまりできない 3 どちらでもない 4 だいたいできる　5 よくできる
5. 今までの学級会では、みんなの考えを合わせて学級の意見を決めることができましたか。	1 できない　2 あまりできない 3 どちらでもない 4 だいたいできる　5 よくできる
6. 今までの学級会では、決まったことにもとづいて自分がこれから何をすればよいのか考えられましたか。	1 できない　2 あまりできない 3 どちらでもない 4 だいたいできる　5 よくできる
7. 今までの学級会では、めあてを達成するために友達と協力することができましたか。	1 できない　2 あまりできない 3 どちらでもない 4 だいたいできる　5 よくできる
8. 今までの学級会では、学級の一員としてよりよい学級にするために努力できましたか。	1 できない　2 あまりできない 3 どちらでもない 4 だいたいできる　5 よくできる
9. 今までの学級会で決まったことを、実行するために取り組むことができましたか。	1 できない　2 あまりできない 3 どちらでもない 4 だいたいできる　5 よくできる

図 1　質問紙調査の用紙

査を実施した。つまり，本研究は質的研究を重視しつつ，数値に基づく客観性を担保するため量的研究の側面からの分析も行った。

なお，TPS と OMP については，教育方法上の工夫として研究者側で提案し，各クラスの教師に了解を得て授業に導入したものである。本研究では，4 年 A 組の 3 学期のデータ（N=30）を活用した。研究対象校にご協力いただき，長期的に学級活動の研究を進めている。そのため，本研究は一連の長期的な研究の一部である。TPS および OMP の形式は図 2 に示す。教師対象のインタビュー調査については，授業映像を視聴して授業時に言葉にはしないが意識していたことや気付いたことなどを聞き取り，音声データ化する「刺激回想法」を活用した。授業の詳細については，学習指導案をもとに後述する。

なお，授業前後で実施した図 1 の質問紙は教師と十分に相談をした上で当時の校長と研究者 3 名によって作成したものである。具体的には，次の項目で実施した。（簡略表記）

1.相手の思いを受け止めながら意見を聞く，2.提案理由を考えて話合いに参加する，3.相手にとってわかりやすく自分の意見を発表する，4.友達のよいところやがんばったところをみつける，5.学級の意見を決める，6.自分がこれから何をすればよいのか考える，7.友達と協力する，8.よりよい学級にするために努力する，9.取り組む。質問項目 1-3 は知識・技能，質問項目 4-6 は思考力・判断力・表現力等，質問項目 7-9 は学びに向かう力・人間性等を意識して作成した項目である。本研究では，特に，学びに向かう力・人間性等とエージェンシーとの関係に着目して検討することとした。また，質問項目 1,4,7 は特別活動で重視する資質・能力育成の視点「人間関係形成」，質問項目 2,5,8 は特別活動で重視する資質・能力育成の視点「社会参画」，質問項目 3,6,9 は特別活動で重視する資質・能力育成の視点「自己実現」を意識して作成した質問項目である。これらについて，5 件法で回答を求めた。なお，質問項目については，筆者らが進めている一連の研究で活用してきた内容である。

アクティブラーニング型ワークシート

※1組は、提案理由の後、出ている意見を一通り説明して言った後に実施。
※2組は、授業の前に実施。
※3組は、話合いの途中で、色々な意見が出て討論している時に実施。

学年（4）　組（　）　番号（　）　氏名（　　）

Think Pair Share

※授業導入時に実施してください。

Think	議題についてのあなたの考えを書いていてください	
Pair	ペアの人の考えを聞いてどう思ったのかを書いてください。	
Share	ペアの人と話し合ったことにもとづいて、学級全体に聞いてもらいたい意見を書いてください。	

※学級全体に聞いてもらいたい意見にもとづいて、これからの話合いに参加してください。

アクティブラーニング型ワークシート
※授業終了時に実施

学年（4）　組（　）　番号（　）　氏名（　　）

One-minute Paper

※1分間で書けることを書いてください。

今日の話合いのめあては達成できたと思いますか。	
今日の話合いを進めるために、自分にできたことはどのようなことですか。	

図 2　TPS および OMP の形式

（林　尚示）

２．２ 授業概要と学習指導案

今回対象とした授業は，小学校第 4 学年 A 組の学級活動（1）の内容である。日時は 2020 年 1 月 31 日の第 3 校時，指導者は T 教諭である。議題は「4 年 A 組のみんなありがとうお別れ会をしよう」であった。

児童の実態としては，学習指導案の中で次のことが T 教諭によって指摘されている。(1) ***男女仲良く協力***して学校生活を送れるようになってきた。(2) 学級全体としては***やる気がありパワーがある児童たち***である。(3) きまりを守って***仲良く学校生活***を送る児童が多い。(4) 生活の中でじっくり考えて行動することが苦手な児童もいる。(5) 担任としては，すべての児童に，ルールのある話合いをとおして***じっくり考えて答えを出し***，決めたことに基づいて皆で実践することのよさをたくさん味わってほしいと思っている。(6) 児童は 1 年間学級会の経験を積み上げて，少しずつ集団としての成長を見せている。*イタリック*の仲良く，学校生活，やる気，パワー，じっくり考えるなどは上記のエージェンシーの定義に関わる部分である。

このような実態を受けて，担任は議題を「4 年 A 組のみんなありがとうお別れ会をしよう」とした。この理由を担任は次のように説明している。(1) 3 学期になり，***議題を募った***ところ「進級・クラス替えを控えて最後にお別れ会をしたい」「クラスでビー玉がたまったので遊びたい」「ごみの捨て方など問題を解決したい」など何種類かの議題が集まった。(2) その中で***学級の仲間へ 2 年間ありがとうの気持ちを伝え***，思い出を作って進級しようという思いをもつ児童が多かった。(3) そこで今回は，そのような思いに沿った会にするためには，どのような内容がふさわしいかを***話し合い，決める***ことにした。なお，本時に至るまでの経過は以下のとおりである。1 月 27 日，帰りの会で司会グループを決める。

2020 年 1 月 28 日，帰りの会で議題を決定した。1 月 29 日，朝の会と帰りの会で事前アンケートの記入と自分の考えを書く時間をとった。1 月 30 日，朝の会・休み時間・給食の時間・帰りの会で，学級ノート作り，話合いの進め方の確認，司会打ち合わせを行った。

決まっていることとしては，3 月某日の学級活動の 2 時間目にお別れ会を行うこと，使える場所と時間は教室 1 時間，校庭 1 時間である。

1 月 31 日の本時のねらいは，中心となる資質・能力として「主体的に学習に取り組む態度」を選択し，中心となる視点として「社会参画」を選択した。そして，具体的なねらいは，「よりよい学級にするために***考えて意見をのべたり***，聞いたりする」である。担任は，事前に図 1 の質問紙で児童たちの状況を確認してから授業を行った。授業は，OECD が Learning Compass 2030 で提唱する the Anticipation-Action-Reflection cycle(見通し・行動・振り返り：AAR)サイクルで実践した。（OECD, 2020）具体的には，表 1 のとおりである。

表 1 「4 年 A 組のみんなありがとうお別れ会をしよう」

段階	進め方	指導上の注意	評価
見通し(予測)	1 始めの言葉，2 計画委員の自己紹介，3 議題の確認，4 提案理由 5.めあて確認 議題　4 年 A 組のみんなありがとうお別れ会をしよう	・話合いのルールを共有する。	□事前に自分の考えをあらかじめ準備し，話合いに臨んでいる。（学びに向かう力・人間性等）
話合いのめあて よりよいクラスにするために考えて意見を言ったり聞いたりしよう			
提案理由　これから 5 年生になり，クラス替えをし，もう 4 年 A 組として集まれないから，最後に 4 年 A 組のみんなにありがとうやクラス替えをしてもよろしくという気持ちをみんなに伝えたい。			
実践	1，話合い ① 柱　ありがとうおわかれ会で何をするか（教室でやること） ・手紙，プレゼント交換（2 学期と同じ） ・大きな紙に感謝の言葉をはる ・くす玉を割る ・ゲームをする。なんでもバスケット（おには，4 年生の思い出を言う），ばくだん落とし，カードゲーム，ビンゴ まとめの前に Think3 分，Pair5 分，Share10 分（発表） Share の後にまとめをする。 2，決まったことの発表	・事前に募った内容を黒板に貼っておく。出ているものの他に意見はないか確かめる。 ・提案理由にふさわしい内容を決めるようにする。	□相手の思いを受け止めたり，相手の立場や考えを理解する。（人間関係形成） □自分もよく，みんなもよくなるために自分の役割を果たす。（社会参画） □みんなで取り組んでいくことを決める。（自己実現）
振り返り	1，話合いの振り返り 2，OMP 3，先生の話，終わりの言葉		□話合いのよかったところや課題をみつけることができる。

（4 年 A 組担任 T 教諭作成。）

（眞壁玲子）

３．結果と考察

３．１　結果

３．１．１ ワークシート分析（質問紙と TPS・OMP）

授業で活用したワークシートへの児童の言及をもとに，エージェンシーの感覚が育成されたかどうかについて，検討することにした。本研究で実施する質的研究に先立ち，図 1

の質問紙調査を実践の事前事後に実施した。なお事後の質問紙については，各質問項目を事後用に「今日の授業では」としている。その質問紙の各項目の数字の平均値を比較し，*t* 検定を実施した（表 2）。

この実践の終了後に TPS と OMP を実施した。TPS では，Think「議題についてのあなたの考えを書いてください。」，Pair「ペアの人の考えを聞いてどう思ったのかを書いてください。」，Share「ペアの人と話し合ったことに基づいて，学級全体に聞いてもらいたい意見を書いてください。」という項目について自由記述による自分の意見の記入を行った。OMP では，質問項目 1「今日の話合いのめあては達成できたと思いますか。」，質問項目 2「今日の話合いを進めるために，自分にできたことはどのようなことですか」という 2 項目について，自由記述による記入を行った。

事前事後質問紙の質問項目は全部で 9 項目ある。*t* 検定では，質問 1 の「知識・技能－人間関係形成」に関する項目「今日の学級会では，相手の思いを受け止めながら意見を聞くことができましたか。」（t=2.257, p<.05），および質問 9 の「主体的に学習に取り組む態度－自己実現」に関する項目「今までの学級会で決まったことを，実行するために取り組むことができましたか。」（t=2.213, p<.05）に有意な上昇があった。
質問 8 の「社会参画－主体的に学習に取り組む態度」に関する項目「今までの学級会では，学級の一員としてよりよい学級にするために努力できましたか。」（t=1.975, p<.1）に上昇傾向が見られた。

表 2　事前事後の比較

	Paired Differences					*t*	*df*	Sig. (2-tailed)	
	Mean	Std. Deviation	Std. Error Mean	95% Confidence Interval of the Difference Lower	Upper				
Pair 1　事後1 - 事前1	0.367	0.890	0.162	0.034	0.699	2.257	29	0.032	*
Pair 2　事後2 - 事前2	0.233	1.073	0.196	-0.167	0.634	1.191	29	0.243	
Pair 3　事後3 - 事前3	-0.233	1.331	0.243	-0.730	0.264	-0.960	29	0.345	
Pair 4　事後4 - 事前4	0.133	0.730	0.133	-0.139	0.406	1.000	29	0.326	
Pair 5　事後5 - 事前5	0.133	0.973	0.178	-0.230	0.497	0.750	29	0.459	
Pair 6　事後6 - 事前6	0.167	1.020	0.186	-0.214	0.548	0.895	29	0.378	
Pair 7　事後7 - 事前7	0.100	0.845	0.154	-0.215	0.415	0.648	29	0.522	
Pair 8　事後8 - 事前8	0.267	0.740	0.135	-0.010	0.543	1.975	29	0.058	†
Pair 9　事後9 - 事前9	0.433	1.073	0.196	0.033	0.834	2.213	29	0.035	*

Note. N = 30.
† p <.1.* p <.05. ** p <.01.

TPS と OMP の自由記述の分析では，エージェンシーに関わる記述を抽出した。その内容が「人間関係形成」「社会形成」「自己実現」に関する記述であるかを検討した。分析は，

特別活動を専門とする研究代表者と，2 名の研究協力者で行い，その結果についてカリキュラム論を専門とする研究分担者が確認をして，最終的な分類を行った。結果を表 3 および表 4 に示す。

4 年 A 組の児童数は 30 人であり，無回答（回答拒否）はなかった。表 2 より，30 件中，エージェンシーに関する記述があったのは，TPS では 12 件，OMP では 10 件であった。TPS の質問項目は，Think「議題についてのあなたの考えを書いてください。」，Pair「ペアの人の考えを聞いてどう思ったのかを書いてください。」，Share「ペアの人と話し合ったことに基づいて，学級全体に聞いてもらいたい意見を書いてください。」というもので，ペアの人との意見交換の結果について質問するものである。OMP の質問項目は，2 つあり，質問項目 1「今日の話合いのめあては達成できたと思いますか。」と質問項目 2「今日の話合いを進めるために，自分にできたことはどのようなことですか」である。TPS の Share に「学級全体に聞いてもらいたい意見」というように，エージェンシーに関わるものがあるが，質問項目が 3 つあったため「Think で書いた意見と同じです。」というように省略されやすいため，エージェンシーについて意識化されたわけではない。OMP の質問項目 2 は「今日の話合いを進めるために，自分にできたことはどのようなことですか」というようにエージェンシーといえる質問であるが，OMP の回答は「自信がついた」というように短いものが多く，詳しい記述に至らなかったため，この項目でエージェンシーに関する記述が少なかったものと推測できる。

表 3　エージェンシーに関する自由記述の件数(N=30)

		OMP にエージェンシーの記述が		
		ある	ない	合計
TPS にエージェンシーの記述が	ある	3	9	12
	ない	7	11	18
合計		10	20	30

表 4　エージェンシーに関する自由記述の分類(N=30)

		TPS			OMP		
		Think 議題についての考え	Pair ペアの人の考えを聞いてどう思ったのか	Share 学級全体に聞いてもらいたい意見	1．話合いのめあては達成できたか	2．自分にできたこと	合計
自由記述件数（件）	人間関係形成	8	2	5	1	2	18
	社会参画	0	0	1	3	2	6
	自己実現	0	0	1	0	3	4

今回の授業ではエージェンシーとかかわるものとして，資質・能力として「主体的に学習に取り組む態度」を選択し，中心となる視点として「社会参画」を選択している。「社会参画」に対応する記述をみてみる。TPS のなかで「社会参画」に関するものには，「次は，ちゃんといけんを言いたい」というものがある。OMP では，「みんながちゃんときいていてきょうのはなし合いはうまくいったと思った」，「同じ意見で自しんがついた」「いけんをどんどんゆえた」，「また学きゅう会でしんかできると思う」の 4 件であった。

ところが，「人間関係形成」に関する自由記述が 18 件（TPS15 件，OMP3 件）であり，「社会参画」よりも多い。社会参画に関する自由記述には，「一人ずつ 4 年 A 組のみんなへのかんしゃの言葉を一人一枚書いた紙を大きな紙にかいてはるのにさんせい。1 人じゃなくて，みんなに言葉を伝えられるから。」(TPS)，「ぼくは，くす玉を先生がわるはとてもいいと思います。ケンカにならなくくす玉は 1 人でわるものだしいままでぼくたちを成長させてくれたからいいと思います。」(TPS）というように，「かんしゃ(感謝)」「ぼくたちを成長」「ケンカにならない」など，学級の仲間を肯定的に見る言葉が多い。TPS では，「おせわ」が 1 件，「かんしゃ」が 1 件，「伝えられる」が 1 件，上記のように「くす玉を先生がわる」としたものが 15 件，「けんか」「もめない」などが 7 件であった。また，OMP では，「みんなで協力する力」が 1 件，「どういう意見を考えてるか分かった」「ペアも同じ考えをもっているんだなと思った」という「意見・考え」が 2 件であった。

「自己実現」に関するものでは，TPS の Share で「自分の意見に決めた」1 件，OMP の質問項目 2 で「自信がついた」など 3 件の計 4 件であった。

（鈴木　樹）

３．１．２ 教師インタビューの分析

先述したように，特別活動は集団活動を通して人間関係が形成される場であり，担任の学級経営と学級活動には重なる部分もある。そのため，本研究は，指導方法だけではなく，担任教師の普段の学級経営の姿勢が児童の回答に影響を与えたのではないかということも考えた。そのため，それらを含めて教師インタビューを実施した。教師インタビューは授業実施日である 2020 年 1 月 31 日の夕方に実施した。授業映像は児童側から教師側を記録したものと教師側から児童側を記録したものの 2 つを用意し，インタビューでは児童側から教師側を記録したものを活用した。手法としては刺激回想法で，映像から気付きや補足説明等をしていただくスタイルでのインタビューである。その他用意した資料は学習指導案，授業に出席した児童の記入した TPS の用紙，OMP の用紙である。トランスクリプトの作成のために，教師の了解を得てインタビューは音声を録音させていただいた。

インタビュー調査のモデレーターは大学教員 2 名と前校長である共同研究者が担当した。インタビュー調査の中でも，今回実施したのは，エージェンシー育成に対して教師が意識している本音の部分を聞き出すインタビューである。インタビュー調査による担任の回答の全体像は次のとおりである（表 4)。なお，分析には，KH Coder version 3.Beta.01a を使用している。

表 4　教員対象事後インタビューの Database status

総抽出語数　（使用）		6,477(2,283)
異なり語　（使用）		891(647)
文書の単純集計	集計単位	ケース数
	文	317
	段落	184
	H5（HTML タグによる見出し）	184

抽出語による分析を行った。本研究においては，資質・能力として「主体的に学習に取り組む態度」を選択し，中心となる視点として「社会参画」を選択した。合わせて，「人間関係形成」,「自己実現」の視点からも，エージェンシーとの関わりについて検討を加えた。まず社会参画については小学校第 4 学年という年齢も考慮して積極的に集団に関わろうとする場面を該当箇所として想定した。その結果，次のような抽出語が発見できた。

抽出語「発言」の例

・すごく真面目な女の子さんで，でもちゃんとみんなのこと考えて，いつも大事な時は，きちんと「発言」してくれたりするので，（全体での社会参画）
・〇〇さんは結構毎回，前回の学活の時からよく手を上げて，「発言」して自分の考えを言うのが好きなタイプですね。（全体での社会参画）
・今日は司会者が最初に「発言」してるときは手を上げず，話を聞いてくださいみたいなことを言ってて，（司会児童の役割としての社会参画）

上記の回答からは，特定の複数の児童が率先して「発言」をして他の児童の社会参画を容易にする働きをしていることや，司会児童が役割としての「発言」をして社会参画を円滑に進める工夫をしていることなどについて教師が評価していることがわかる。

人間関係形成については次のような抽出語が発見できた。

抽出語「人」の例

・子ども達はペアで話し合ったことは凄く前向きに捉えてて，なんか同じ考えの「人」がいるんだって，そこで確かめてほっとしたり，自信が持てたって書いてる子もいる（TPS の Pair）
・それは凄く良い案かなって思いますね。（略）本人にも，隣の「人」には自分の意見を言ったってのがあるので（TPS の Pair）
・まぁ今日の会の中でも，それをやり出した「人」の気持ちが，なんかそれが潰れちゃうとって言ってくれた子がいて，（他者への配慮）

上記の回答からは，TPS の Pair での学習が人間関係形成にとって効果があったと考えていることが明らかになった。また，他者への配慮のある意見が出て，人間関係形成について教師は一定の評価のできる内容であったと考えていることがわかる。

自己実現については，次のような抽出語が発見できた。

抽出語「自信」の例

・彼はね今日意見言ってました。まあまあね。「自信」持ったのかなぁ。（児童の変容への気付き）
・同じ考えの人がいるんだって，そこで確かめてほっとしたり，「自信」が持てたって書いてる子もいるので，なんか凄くそれは嬉しかったみたいです。（ワークシートによる評価）
・〇〇さん。ここの紫の子ですね。そうですね，すごい「自信」があるんですね，彼女はね（教師による観察評価）

自己実現とは自己の内面的欲求を社会生活において実現することであるが児童の発言には専門用語は登場しない。そのため，ここでは，「自信」を持てる状態を抽出した。教師は児童の状態や変化をみとったり，ワークシートから理解を深めたりしている。今回の授業では児童の「自信」の持てている状態について教師から多数の回答を得ることができた。

３．２ 考察

事前事後質問紙調査の結果より，本実践では，特別活動の 3 つの視点である「人間関係形成」と「社会参画」と「自己実現」が，いずれも上昇し，児童の資質・能力がバランスよく上昇していることが明らかになった。また，担任教師が本時のねらいで，中心となる資質・能力として選択した「主体的に学習に取り組む態度」，中心となる視点として選択した「社会参画」に関する質問項目 8 と質問項目 9 に有意差が見られ，調査の結果から，担任教師のねらいを達成しているといえる。

表 4 エージェンシーに関する自由記述の分類（N=30）とその記述を見ると，担任教師が設定した「社会参画」ではなく「人間関係形成」が多かったものの，本時の具体的なねらいとして設定した「よりよい学級にするために考えて意見をのべたり，聞いたりする」という点について，児童はとてもよく受け止めている様子がうかがわれる。

担任はねらいとして「社会参画」を設定したにもかかわらず，自由記述に関して「人間関係」に関するものが多かった理由として，次の 2 つが考えられる。

第一に，特別活動は集団活動を通して人間関係が形成される場であり，担任が「人間関係形成」に重点を置いた学級経営と学級活動を実践してきたことが考えられる。「3.1 授業概要と学習指導案」に示した児童の実態で，「(1) 男女仲良く協力して学校生活を送れるようになってきた。」と「(3) きまりを守って仲良く学校生活を送る児童が多い。」というように「仲良く」という言葉が 2 つ入っている。このことから，担任が「人間関係形成」に注目してきたことが分かる。このことは，日本の学校の学級経営としては当然のことと思われるが，教科指導を中心とする OECD 加盟国の中では特徴のある結果である。

第二に，この実践では，児童たちが社会参画する社会は，同時に児童たちが所属する学級であるため，自由記述に現れた「人間関係形成」は「社会参画」を同時に意味するのではないかという推定ができる。つまり，本実践では，「参加する社会」≒「児童が所属する学級」であるため，学級という社会で人間関係をつくることが，同時に社会に参画することになっている。その結果，「社会参画」≒「人間関係形成」（「社会参画」が「人間関係形成」と密接な関連を持つ）ことになり，人間関係形成の自由記述が多くなったことが予想される。担任教師は，この点を区別するつもりで実践を行ったとしても，それを受け止める児童には，この区別がつきにくかったのかもしれない。これは，担任教師がこの実践で「社会参画」の育成を意識していたにもかかわらず，児童には「人間関係形成」の育成が行われたという隠れたカリキュラム(hidden curriculum)だと解釈することもできる。『特別活動指導資料 みんなで，よりよい学級・学校生活をつくる特別活動 小学校編』（国立教育政策研究所教育課程研究センター，2019 p.30）には，「児童は，学校生活を通してその時々の，『なりたい自分』に近づこうと努力します（自己実現）。同時に，多様な他者とよりよく関わろうとします（人間関係形成）。さらには，所属する集団の一員としての役割を果たそうとします（社会参画）。」という例を挙げて，「このように『人間関係形成』『社会参画』『自己実現』の三つの視点は密接に関連しており，明確に区別されるものではないことにも留意する必要があります。」というように 3 つの視点に密接な関係があることを指

摘している。

先に述べた「社会参画は特別活動とエージェンシーの共通の鍵概念」（松尾ら, 2020）と合わせるとエージェンシーと特別活動の重なりについて文献研究からも指摘できる。本研究では，文献研究での着想について，実際の教育実践でも確認できるのかどうかという調査結果を生かしてアプローチすることに新規性を求めようとした。

この視点で本実践を考察すると,「学級の児童が多様な他者とよりよく関わろう」という「人間関係形成」をしながら,「所属する集団としての一員の役割を果たそう」とする「社会参画」を行ったと解釈できる。これは，担任教師が設定した本時の具体的なねらい「よりよい学級にするために考えて意見をのべたり，聞いたりする」ということをとてもよく達成していることを示している。このように，3 つの視点の密接な関連を考慮しながら児童の資質・能力を育成することが必要だといえる。

本研究で育成を目的としたエージェンシーは,「社会参画を通じて人々や物事，環境がより良いものとなるように影響を与えるという責任感を持っていることを含意する」という定義であり,「社会参画」という言葉のほかに,「人々（中略）がよりよいものとなるように影響を与える」という「人間関係」,「人々や物事，環境がよりよいものとなるように影響を与えるという責任感を持っている」という「自己実現」の 3 つが含まれている。このことより，特別活動の 3 つの視点を育成するということは，エージェンシーを育成するということにつながっていることが示唆された。　（鈴木樹・林尚示）

４．結論

本研究では，学級活動が果たすエージェンシー育成の教育課程上の役割や機能について整理し，説明することを試みた。また具体的にどのような学級活動を実践するとエージェンシーの育成が期待されうるか，あるいは，どういう実践改善がエージェンシー育成に必要かを明確にして実践を行うことをめざしたものである。TPS と OMP を教育方法上の工夫として導入した小学校の学級活動（1）を事例として，OECD Learning Compass 2030 のエージェンシーの感覚を高める指導方法について考察を行った。その結果，次の 2 点について明らかにすることができた。

1 つ目に，TPS と OMP を用いた指導方法で，小学校の学級活動において児童のエージェンシーの感覚がどのように育成されるのかということについて,感覚の言語化,共有化,表出化を通して，その一部を見ることができた。特に，教師のインタビューの回答から，TPS の Pair の場面での効果に着目する教師の発言が多い傾向があることが明らかになった。一方，45 分という授業時間の中で，TPS と OMP を併用することには時間的制約が伴うこと，感覚の言語化にはメタ認知の力が必要なため，すべての学年で実施するのは難しいことなど，その効果的な導入についての検討課題が明らかになった。

2 つ目に，小学校の学級活動においては，集団的ウェルビーイングの実現に資するエージェンシー（集団的エージェンシー）の感覚の重要性について教師は指導案段階から経験

的な感覚として意識していた。それと同時に，児童の個人差はあるものの，TPS や OMP のワークシートの回答からもエージェンシーの感覚の育成を顕在化できた。今後は，この経験的な感覚をエージェンシー育成のプロセスの具現化という観点から，いかに具体的な計画として可視化し，共有化するかということが課題となる。

また，児童の記述からは「人間関係形成」については記載が多いが「社会参画」について少ない。この理由の詳細な解明も今後の課題である。　（安井一郎）

謝辞

本研究は JSPS 科研費 18K02563 の助成を受けたものである。ご協力いただいた東京都の小金井市立小金井第二小学校の皆様に深く御礼申し上げる。

引用文献

扇原貴志, 柄本健太郎, 押尾恵吾 (2020)「中学生における生徒エージェンシーの関連要因および中学生が重視するウェルビーイングの分野」,『東京学芸大学紀要．総合教育科学系』（71），669-681.

国立教育政策研究所教育課程研究センター（2019）『特別活動指導資料　みんなで，よりよい学級・学校生活をつくる特別活動　小学校編』，文溪堂.

中央教育審議会初等中等教育分科会（2020）「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す，個別最適な学びと，協働的な学びの実現～（中間まとめ）」，文部科学省，Retrieved from https://www.mext.go.jp/content/20201007-mxt_syoto02-000010320_2.pdf（January 4, 2021）

松尾直博・翁川千里・押尾惠吾・柄本健太郎・永田繁雄・林尚示・元笑予・布施梓（2020）「日本の学校教育におけるエージェンシー概念について：道徳教育・特別活動を中心に」,『東京学芸大学紀要．総合教育科学系』(71)，111-125.

OECD (2018) 'The future of education and skills Education 2030 the future we want', Retrieved from https://www.oecd.org/education/2030/E2030%20Position%20Paper%20(05.04.2018).pdf (May 4, 2020)

OECD (2019) 'OECD Future of Education and Skills 2030 Conceptual learning framework OECD LEARNING COMPASS 2030' Retrieved from http://www.oecd.org/education/2030-project/teaching-and-learning/learning/learning-compass-2030/ (May 4, 2020)

OECD (2020) 「Student Agency for 2030 仮訳 2030 年に向けた生徒エージェンシー」, Retrieved from http://www.oecd.org/education/2030-project/teaching-and-learning/learning/student-agency/OECD_STUDENT_AGENCY_FOR_2030_Concept_note_Japanese.pdf （January 8, 2021）